

多摩川左岸における立川段丘面区分の再検討

On the subdivision of Tachikawa terrace along the Tama River, west of Tokyo

小山 善雅 [1]; 久保 純子 [2]

Yoshimasa Koyama[1]; Sumiko KUBO[2]

[1] なし; [2] 早稲田大・教育

[1] none; [2] School of Education, Waseda Univ.

多摩川左岸に発達する立川段丘は、最終氷期後半の地形面や古環境の模式地とされてきた。立川面相当の段丘面群に関しては山崎(1978)が立川1面(Tc1)・立川2面(Tc2)・立川3面(Tc3)という区分を行い、立川市街付近に広く分布するものをTc2面とし、国立市南西の青柳付近に分布するものをTc3面とした。しかしTc1面とTc2面の境界は地上部分では明確に現れず、地形的には立川段丘面はひとつづきにみえる(町田ほか1971)。このため、Tc1面の分布範囲は下流の埋没段丘との連続を含め、明確ではなかった。

発表者らは相模川で得られた海水準変化ならびに段丘形成史(久保1997)をもとに、Tc1面とTc2面の再定義をおこなった。ここではATテフラが酸素同位体比ステージ(MIS)3と2の境界付近に位置することより、立川面のうちAT以上の関東ローム層を風成でのせる面をTc1面、ATより上位の層準の関東ローム層に覆われる面をTc2面とし、それぞれMIS3とMIS2の時代の多摩川河床としてとらえた。

本研究では以上の点を踏まえ、立川～調布付近における多摩川の立川段丘面(Tc1面とTc2面)の細分を試みた。細分の手法としては、ボーリングデータからローム層の層厚の違いを読み取り、区分を試みた。また、16地点でハンドオーガーによりローム層を掘削し、ATが含まれるかどうかを確認した。その結果、ボーリングデータでは立川など上流側で3m未満、野川沿いの下流側では3m以上のローム層を持つという傾向が認められたが、ばらつきが大きく明瞭な区別ができなかった。一方ハンドオーガーによる掘削では、16地点中9地点でATに対比されるバブルウォール型火山ガラスが地表から2~2.5m付近に認められた。これらのデータに加え、遺跡発掘調査による断面記載なども用いて区分をおこなった。

以上の結果、Tc1面は従来考えられていた(Kubo, 2002)より上流側の立川市街付近まで分布し、またTc2面は多摩川とTc1面にはさまれるようにして下流側にも細長く分布することが明らかになった。また、多摩川河口から20kmの粕江付近で沖積面に埋没する立川面はほとんどがTc1面ということになり、Tc1面は地下において広い範囲で埋没していることが考えられた。これはMIS3の時代に比較的広い段丘面が発達したという相模川の結果とも調和する。なお、Tc1面とTc2面の境界の上流側は立川断層と接している。そのため立川断層の断層崖の一部はTc1面とTc2面の段丘崖でもあるという可能性が示された。